

地方公務員 file

## 風を起こす

# 「いかにも役人」なんて言わせない！ 楽しく仕事しようよ

深谷市総合政策部ガーデンシティふかや推進室長

## 吉田二郎さん

個人の庭を開放して花や木を鑑賞してもらおうオープンガーデン。毎年四月下旬に開催するイベントでまちを活性化した埼玉県深谷市の吉田二郎さんにお会いした。その評判を聞き多くの自治体職員が視察に訪れるが、「まず役所が変わらないと。楽しくなければ市民も動いてくれませんよ」。その仕事ぶりを拝見した。

深谷と言えば、長ねぎが有名だ。関東周辺に住んでいて「深谷ねぎ」を知らない人はまずいないだろうが、チューリップやゆりなどの切り花でも全国有数の産地であることは、教えていただくまで知らなかった。

「ビニールハウスの中で生産してつぼみのときに出荷してしまうので、以前は深谷市民でも知らない人が結構いましたから…」

そんな隠れた「花のまち」深谷市の潜在能力を目覚めさせたのが、二〇〇四年度（平成一六年度）にスタートし

た花を活かしたまちづくり「ガーデンシティふかや」事業である。中核となるイベント「花フェスタ&オープンガーデンフェスタ」の開催は今年で五年目を迎え、周辺地域からも多くの見物客が訪れるようになった。いまやガーデンシニア愛好者を中心に「ガーデンシティふかや」の知名度はグングンと高まってきている。

このイベントの仕掛け人が、市の職員やボランティアからも親しみを込めて名前と呼ばれている「二郎さん」だ。



【よしだじろう】

昭和32年（1957年）生まれ、埼玉県深谷市出身。高校卒業後、民間企業を経て、昭和58年（'83年）深谷市役所に入庁。公民館を振り出しに、総務部財政課、企画部企画課、政策審議室、総合政策部政策推進課などを経て、平成16年（'04年）より総合政策部ガーデンシティふかや推進室室長。奥さんと長男の3人家族。趣味はゴルフ、音楽鑑賞、刻書。音楽は30年間矢沢永吉オンリーで「休日に大音量で聴くのが最高です！」



(左) 自らデザインや組版まで携わって作成した印刷物はプロ顔負けの出来映え  
(円内) FUKAYAの字をロゴ化しオリジナルバッジを作成

名刺に「ガーデンシティふかや・検索」と印刷されているので、早速ネットで検索すると、すぐにホームページがヒット。今年は四月二六、二七日に開催されたイベントの様子がたくさん写真で紹介されている。

中でも人気を呼んでいるのが、市内のガーデニング仲間のグループで主催する「オープンガーデンフェスタ」だ。個人宅の自慢の庭を見物客に開放するイベントで、今年は過去最高の七四軒が参加。期間中、地図を片手に深谷市の街を歩き回るガーデニング愛好者たちで大いに賑わった。

### 市民との協働って、何？

#### ——ソフトを活かしたまちづくりへの挑戦

二郎さんは、もともと花づくりが好きだったわけではない。最初のきっかけは、総合政策部政策推進課の課長補佐だった〇三年に、新井家光市長から受けた「地元特産の花を活かしたまちづくりを考えるように」との指示。「園芸のことは今もよくわからない」と頭をかかすが、目的は従来のハコモノのハード主体から、花というソフトを活かしたまちづくりへと転換することである。

「まちづくりは市民との『協働』が大切だと言われますが、実際には協働になっていないことが多く、以前から不満に思っていました」

深谷市でも、市民に参加してもらって、花づくりに関係した事業にも取り組んできた。しかし、どうしても市役所主導の活動になりがちで、市民には「やらされている感」を持たれてしまう。

どのようにしたら市民と本当の意味での協働を実現できるのか。そう考えていた二郎さんは、外部のコンサルタントなどに依頼するのではなく、「一番、深谷のことを知っているはず」の市役所の若手職員を集めてプロジェクトチームをつくり、まちづくりの具体案作成に着手した。

花を活かしたまちづくりは、全国でも多くの自治体を取り組んでいるテーマだ。チームではまず、全国から事例をできるだけ集めて深谷市でも実現可能なものを絞り込んだ。そこで二郎さんは、英国などで人気のオープンガーデンという活動があることを知った。これなら市民主体の活動が実現できると考え、〇三年末にオープンガーデンを盛り込んだまちづくり報告書「ガーデンシティふかや」を市長に提出した。

そこから「チーム二郎」の怒涛の活躍が始まる。「新年度の四月から事業を始めるのでは、花が咲く時期に間に合わない」との市長の鶴の一声で、〇四年二月に政策推進課六人を二つに分割して「ガーデンシティふかや推進室」を設置。深谷市内で庭のきれいな家を

リサーチし、飛び込みで三軒のお宅を訪問した。

「そのうちの二軒が、NHKの趣味の園芸にも出演したことのある、その道では有名な方。『オープンガーデンをやりたい』と提案したら、『面白いわねえ』と乗ってくれて、すぐにガーデニング仲間にも声を掛けてもらえたのがラッキーでした」

最大の難関と思われていた市民の協力を、持ち前の行動力で一気にクリアした。しかし、安心したのも束の間、事態は二郎さんも予想していなかった方向へと動き出す。「せっかくだから薔薇がキレイな五月にやりましょう」と、話が盛り上がってしまったのだ。

慌てたのは二郎さんだ。五月開催では準備期間がもう二カ月を切っている。市役所から話を持ちかけておいて、せっかくのやる気に水を差すわけにもいかない。「それからは寝ずに働きました」との甲斐あって、記念すべき第一回オープンガーデンフェスタは〇四年五月二一〜二三日に開催された。

### カネは出せなげど、手間なら出す！

「実はオープンガーデンフェスタに深谷市から補助金などは全く出ていません。すべて市民のボランティア。もちろん市役所もおカネ以外のことは何でもやりました」



高校球児時代の体型を  
現在も維持

二郎さんは最初に、オープンガーデンフェスタの主催を深谷市ではなく、ボランティアグループにすることを提案した。「まず名前を付けてください」とお願いして「深谷オープンガーデン・花仲間」という名前のボランティアグループが誕生した。

問題は人集めのための宣伝・

PR活動である。これは「チーム二郎」で請け負った。「大のパソコン好き」という二郎さんが、出版・印刷会社でも使っている専門ソフトを見事に使いこなして、チラシやパンフレットなどに必要なロゴマークから、開催日に見物客に配布する地図などの印刷物のデザインまですべて作成した。

「市の広報誌に記事を掲載する時間もなかったので、マスコミに声を掛けて開催日前に記事を書いてくれるようお願いしますと回りました」

○四年は、一九九〇年の大阪・花の万博（国際花と緑の博覧会）、二一〇〇年の兵庫・淡路花博に続き、静岡・浜名湖花博が開催された年でもあり、マスコミも二郎さんの投げたネタに上手く飛びついてきた。こうした裏方の仕事をすべて市役所で引き受けることで、市民はオープンガーデンに向けた庭の手入れや見物客の受け入れ準備に専念。市民と市役所の協働の成果が第

一回からイベントを成功へと導いた。

### 役所のノウハウを市民に伝授

#### 市民パワーを活かすコツ

イベントの主催をなぜ市役所にしなかったのか？ その理由を二郎さんはこう説明する。

「市役所は、三年ぐらいで人事異動があります。最初に事業を始めた人間は一生懸命やりますが、後任を育てる時間の余裕がありません。それが事業が長続きしない理由なのです。公務員は一生懸命やっても、もらえる給料は同じですから…」

イベント開催で大変なのは立ち上げのときだ。そこで培ったノウハウがあれば、あとは上手く回っていくようになる。そのノウハウを市役所で継承していくのが難しいのであれば、オープンガーデンに情熱を燃やしているボランティアグループにノウハウを移管したほうが、イベントも長続きするし、もっと盛んになっていく可能性もある。

オープンガーデンフェスタの第二回目は、半年後の〇四年一〇月に市役所主催の第一回花フェスタと同時に、第三回目以降は毎年春の年一回開催となった。二〇〇六年の第四回では、英国で自慢の庭を紹介する人気の冊子「深エロブック」の深谷市版として「深谷オープンガーデンブック」（隔年発行）

を「チーム二郎」で作成したが、これもノウハウごとボランティアグループに移し、今年、二〇〇八年版が見事に上がった。

「本の版下作成は私がやりましたが、広告集めは市民の方々に動いてもらいました。これまで広告など出したことのない近所のそば屋さんや駄菓子屋さんからも集まり、予算を大きく上回って一〇〇万円を超えました」

広告料は一ページ二万円、半ページ五〇〇〇円、四分の一で三〇〇〇円に設定。一冊五〇〇〇円で、二年間で三〇〇〇部を販売する予定だったが、「一年目で二〇〇〇部以上売れて、来年販売する分が足りない」とのうれしい悲鳴が出ているほど。まさに市民パワーである。

### 民間会社勤めと公民館の経験が 発想の原点に

二郎さんは、生まれも育ちも深谷市で、少年時代は野球に明け暮れた。甲子園に憧れて強豪・深谷商業高校に入學し、四番キャッチャーで輝かしい戦績を残したが、甲子園には一歩及ばなかった。卒業後、実家の鉄工所を継ぐと専門学校に入學したが、挫折。市内のスポーツ用品店で働いていた二五歳のとき、結婚式を控えて奥さんの両親に「二五歳以下の年齢制限で市役所

県外からも多くの見学者が訪れる  
オープンガーデンフェスタ



開放された個人の庭先で、提供者と見学者との交流も生まれる

が職員募集をやっているから受けてみたら…」と勧められたのが、人生の転機だった。

「最初に配属されたのが公民館。深谷市は公民館が地域ごとに充実している。市民からの苦情も直接飛び込んでるので、ここで市民目線の行政を学びました」

民間企業での接客・営業経験と公民館での行政経験が、三〇代半ばで配属された企画部企画課で開花する。関東地方では最大規模の公営温水プール「パティオ」の建設に携わり、民間発想の大胆なアイデアを次々に出して事業成功に貢献した。このときも採算ラインである年間一〇万人の来場者を集めるために、東京デイズニールランドのコンセプトや集客の秘密を勉強。さらに、子供向けテレビ番組の撮影場所に提供して知名度アップを図るなどのメディア戦略も積極的に展開した。

## 役所は面白い仕事の宝庫

### ―次は「緑の王国」建設へ―

「背中を見て、いかにも役人と思われるのだけは嫌だと思って仕事をしてきました」という二郎さんは、よく若い職員とも飲みに行く。「二郎さんはやりがいのある仕事ができ羨ましい」と言う彼らに「面白いことを考えないオメガが悪い。仕事は面白く、楽しくやれ！詰まらない顔で仕事はするなよ」と励ます。

「だって、そうでしょう。民間企業より、市役所のほうがまだまだやれる仕事はたくさんあると思いませんか？これまで前例踏襲ばかりして、新しいことを何もやってなかったんですから」そんな二郎さんが次にたくらんでいる（？）のが、「ふかや緑の王国」の建設である。今年六月に王国建設予定地である埼玉県農林総合研究センター園芸研究所深谷試験地跡で大々的な計画発表会を開催し、来年春の建国をめざす。深谷市にとっても、平成二〇年度の目玉事業だ。

埼玉県が研究所の閉鎖を決めた後、深谷市に施設の跡地利用を二年前から打診していた。「二郎さんのところに持っていけば、何か使い道を考えるだろう」と副市長から話が来たとき、「待ってました」とばかりに王国建設計画をぶち

上げた。文字通り建設計画だけに、古い建物などに事前に手を加えず、市民のアイデアと手作りで王国づくりを進めていくことにしている。構想が発表されると市民からの問い合わせが殺到し、すでに「緑の王国をサポートする会」というボランティアグループも誕生した。「最初からおカネはかけません。まずは下草刈りや植木の剪定から始めますよ。古い建物もみんなで大工仕事しながら直します。最初からキレイにしちゃうと汚せませんから」

自然の中で子供たちが自由に遊べる場をつくったり、お年寄りが来て昔の遊びを子供たちに教えたり、旧試験場を活かした野菜づくりをしたり、ガーデニングの教室を開いたり、夢は広がるばかりだ。「まちづくりは結局、人づくり。じっくり腰を据えてやります」と笑う二郎さん。市民一人一人が主役になれる王国づくりを一緒になつて楽しもうとしている。



千葉 利宏

〔ちば としひろ〕昭和33年（1958年）生まれ。札幌市出身。東京理科大学建築学科卒、日本工業新聞社（フジサンケイ・ビジネスアイ）入社。経済記者としてIT産業、金融業、自動車産業、住宅・不動産業などを取材。平成13年（2001年）からフリーで経済ジャーナリストとして活動。日本不動産ジャーナリスト会議幹事。